夏休みおすすめ図書　～高校生向け～

「チア男子！」

朝井　リョウ／著　集英社　９１３．６ア（一般）

幼い頃から柔道に打ち込んできた大学１年の晴希は、怪我をきっかけに柔道部を退部。同じころ柔道をやめた一馬はある理由から、大学チアリーディング界初の男子のみのチーム結成を決意する-。

「愛あるところに神あり」

レフ・トルストイ／著　北御門　二郎／訳　あすなろ書房　９８３ト

マルティンという信心深い靴屋がいました。ある晩、マルティンは「明日、おまえのところに行くよ」という神様の声を聞きました。翌朝、いつ神様は来るだろうと往来をながめていると、老人が雪かきをしていまして。そして…。

「人にはたくさんの土地がいるか」

レフ・トルストイ／著　　北御門　二郎／訳　あすなろ書房　９８３ト

「土地さえじゅうぶんにあれば、悪魔だってどうもできやしない」パホームの口からでた言葉を、ペチカのうしろで悪魔は何もかも聞いていました。やがて、パホームは土地を手に入れました。そして…。

「スターガール」

ジェリー・スピネッリ／著　千葉　茂樹／訳　理論社　９３３ス

スターガールはちょっと変わった転校生。ランチタイムにウクレレでハッピーバースデーを歌ったり、味方チームだけじゃなく相手チームも応援するちょっとおかしなチアガールだったり。そんな彼女はいつしかマイカ・ハイスクールの人気者に。ところがハイスクールのバスケットボールチームが快進撃を続けていくにつれて、徐々にスターガールへの風当たりが悪くなってきて…。

「豊かなことば　現代日本の詩６　吉野　弘詩集　奈々子に」

吉野　弘／著　伊藤　英治／編集　岩崎書店　９１１．５ヨ

家族の営みや日々の暮らしを深く、やわらかくうたっている詩集。日々の忙しさに追われ、忘れかけていた感謝や慈しみ、家族愛を呼び起こされる、そんな作品です。

自立に向けてこれから歩み出す方々に、心あたたまるエールとなり、メッセージとなり、深く胸に届くことでしょう。

「１４歳からわかる生命倫理」

雨宮　処凛／著　河出書房新社　４９０アマ

安楽死・尊厳死、脳死判定、新型出生前診断、優性保護法等々、今、命に関係する言葉が巷には溢れています。さらに、昨今の技術の進歩により、「命」と「経済」との関係で、「命の格差」が生まれつつあります。

本書は、「命」の尊さを、さまざまな立場の方々の話を紹介し、「命」を巡る問題について著した内容で、読む前と読み終えた後とで、あなたの思いが変わったか、変わらなかったか、問いかける一冊です。

「旅のラゴス」

筒井　康隆／著　徳間書店　９１３.６ツ（一般）

北から南へ、そして南から北へ。突然高度な文明を失った代償として、人びとが超能力を獲得しだした「この世界」で、ひたすら旅を続ける男ラゴス。集団転移、壁抜けなどの体験を繰り返し、二度も奴隷の身に落とされながら、生涯をかけて旅をするラゴスの目的は何か？異空間と異時間がクロスする不思議な物語世界に人間の一生と文明の消長をかっちりと構築した爽快な連作長編。今なお人気のロングセラー作品です。

「君の膵臓をたべたい」

住野　よる／著　双葉社　９１３．６スミ　（一般）

ある日、主人公の「僕」が、病院で偶然クラスメイトの山内桜良の秘密の日記帳を拾います。その日記帳に記されていたことは…

全く正反対の二人が次第に心を通わせていきながら成長していきます。人と関わること、人と繋がることの大切さを教えてくれる一冊です。

インパクト大のタイトルに隠された本当の意味とは。２０１７年７月に公開された映画の原作です。

「アップ・セット・ボーイズ　明日葉高校将棋物語　上・下」

柳葉　あきら／著　築摩書房　Ｂ７２６ヤナ（一般）

今、話題の棋士と言えば、史上最年少でプロとなり、公式戦の連勝記録を破竹の勢いで伸ばし続けていた「藤井総太四段」ですが、そんなプロ棋士を彷彿とさせる物語があります！

明日葉高校に進学した沢村・福岡・武藤の三人組が、将棋同好会の門を拓き、新しい仲間達と力を合わせ、幾多のライバルと戦いながら大きな壁を乗り越え成長していく熱血青春物語です！

「TUGUMI」

吉本　ばなな／作　中央公論新社　９１３．６ヨ（一般）

『確かにつぐみは、いやな女の子だった』物語はこんなキョーレツな文からはじまる。

病弱で生意気、けれどどこか人を惹きつけるつぐみと、彼女のまわりの、優しく、たくましい人たち。ふるさとで過ごす最後の夏。海辺の小さな町の、もう二度ともどらない、一瞬のきらめくような日々。

著者独特の、透明感あるみずみずしい文章で紡がれた、浄化されるような美しい物語です。

「ツバキ文具店」

小川　糸／著　幻冬舎　９１３．６オガ（一般）

主人公は鎌倉で文具店と代書屋を営む雨宮鳩子こと通称ぽっぽちゃん。

その他登場人物にお隣に住むバーバラ婦人や教師のパンティー、男爵、ＱＰちゃんなど個性豊かなメンバーが勢揃い。

人情味溢れるぽっぽちゃんと、何気ない日常の中にある、ささやかな喜びや人の温もりを感じられる心あたたまる物語。

「世界を、こんなふうに見てごらん」

日髙　敏隆／著　集英社　Ｂ４６０ヒダ（一般）

白黒はっきりさせるって、とてつもなく大変だ。とくに、自分以外の他者について。よく、人の気持ちを想像しなさいなんて言われるけれど、あくまでそれは、自分の延長線上から生まれたものにちがいはない（のではないか？）。本当のことが、本当のように見えるだけで、実は自分の思い込みや先入観だったってオチがついたりしたら、恥ずかしくて目もあてられない。

この本の作者、日髙先生は、それを「イリュージョン」と呼ぶ。ちょっと難しく言うと、『個々の生物がそれぞれの感覚知覚を通し、それぞれの世界を認識している』ということ。「イリュージョンなしに世界は見えない」とも言っている。「イリュージョン」は悪いものではなくて、ごくあたりまえで、むしろ楽しいものなんだって。

そういうものだと思えば、ごくありふれたものが、またちがった見方となって、自分の前に立ち現れるかもしれない。

目からウロコをぼとぼと落とそう。素直な気持ちで感嘆しよう。新しい視点を迎えいれて、清々しい気持ちになれる本です。

「夏への扉」

ロバート・Ａ・ハインライン／著　早川書房　Ｂ９３３ハ（一般）

本書の表紙の裏側には本書を紹介する次の一文が記されている。

「ぼくの飼っている猫のピートは、冬になるときまって夏への扉を探しはじめる。家にあるいくつものドアのどれかひとつが、夏に通じていると固く信じているのだ。１９７０年１２月３日、かくいうぼくも、夏への扉を探していた。最愛の恋人に裏切られ、生命から２番目に大切な発明までだましとられたぼくの心は、１２月の空同様に凍てついていたのだ！　そんな時、〈冷凍睡眠保険〉のネオンサインにひきよせられて……永遠の名作。」とあります。

１９５６年(昭和３１年)発表のSF小説です。うーん、名作かどうかは読んでみてからのお楽しみですね。

「そして、バトンは渡された」

瀬尾　まいこ／作　文藝春秋　９１３．６セオ（一般）

森宮優子、１７歳。父親が３人、母親が２人いて、これまでに４回苗字が変わった。家族が変わり、環境が変わり、考えも心の持ち様も、そのたびごとに変化してきたけれど、それでもいつだって、両親を愛し、愛されてきた。

友人関係に悶々とする優子を元気づけるために、スタミナ餃子ばかりを食べさせるお父さんもいれば、優子を喜ばせたい一心で、すぱっと再婚を決めたお母さんもいた。互いに遠慮しがちだったけれど、毎日一緒に朝ごはんを食べてくれたお父さんだって、不器用ながら精一杯の愛情を与えてくれた。

血のつながりはなくても、家族は家族。たとえ別れることになっても、ずっと大事な思い出として、心の中にあり続ける。優しさが静かに降り積もるように、あたたかな気持ちになれる物語です。

「アルケミスト」

パウロ・コエーリョ／著　平尾　香／絵　山川　紘矢／訳
山川　亜季子／訳　角川書店　９６９コ（一般）

羊飼いの少年は、同じ夢を二度見た。それは、エジプトのピラミッドに、彼を待つ宝物が隠されている、というもの。スペインから海を渡って、キャラバンとともに砂漠を越えるあいだ、少年は、運命を導く様々な人と出会う。王様や、どろぼう、クリスタル商人、イギリス人、運命の女性、そして、錬金術師…。

旅の途中で次々とあらわれる前兆をとらえ、観察と考察をくりかえし、太陽や風と会話をして、自分の心の声を聞く。

水が自然とあつまるみたいに、静かに生まれて、やがて大きな流れとなるような、不思議な夢と勇気を貫く物語です。

「悲しみよ　こんにちは」

フランソワーズ・サガン／著　朝吹　登水子／訳　新潮社　Ｂ９５３サ（一般）

あの夏、セシルは１７歳で、父とその愛人であるエルザとともに、ヴァカンスを楽しんでいた。南仏の海辺の別荘で、やはりヴァカンスに来ていた大学生のシリルとも知り合い、陽気に、幸福に過ごしていた。父のもうひとりのガールフレンド、アンヌが合流するまでは…。知的で高潔、適切な言動と行動、自制的だが有無を言わせぬ強さを持つアンヌ。精神的に追い詰められたセシルは、葛藤の末、ある計画を思いつく。

うまくいかない物事や、家族との軋轢、自己嫌悪と責任転嫁が乱気流のように心の中で吹き荒れるさまは、身に覚えのある人も多いのではないでしょうか？エスプリの利いた文章表現も洒落ていて、気持ちがいいです。

「アスリーツ」

あさの　あつこ／著　中央公論新社　９１３．６アサ（一般）

中学２年の沙耶は、今後を期待されるハードル選手だったが、県大会決勝で怪我をしてしまい、その後陸上をやめた。それまで陸上中心だった生活が一変、何を目標にすれば良いか分からない生活が続く。そんなとき、友人に誘われて行った場所で、初めての競技に出会う。それがライフル射撃だった。ライフル射撃に魅せられた彼女は、射撃部のある進学校を目指すことを決意する。

「夢をあきらめなければ宇宙にだって行ける」

星出　彰彦／著　すばる舎　５３８ホシＹ（一般）

星出さんは、２度国際宇宙ステーション（ＩＳＳ）でミッションを遂行した宇宙飛行士です。２０１２年の２度目は、高度約４００ｋｍの宇宙空間を飛ぶＩＳＳで４ヶ月を過ごしました。命の危険がある宇宙飛行士になぜなったのか。夢の実現のためにはどのような苦労があったのか。ミッション成功の鍵は何なのか。全ページに掲載されている宇宙空間から見た写真とともに楽しめる１冊です。

「つまずいても、壁にぶつかっても、あきらめずに前へ踏み出そう。」

「カエルの楽園」

百田　尚樹／著　新潮社　９１３．６ヒ（一般）

この本は、ファンタジーの顔をした予言書かもしれません。未来を生きる一人の日本人として、どうか心して読んでください。

平和とは防衛とは、さらに共存とはと、いくつもの哲学的示唆を投げかけてくるこの童話に、君たちは何を思うでしょうか。君たちなりの答えを出すことができるでしょうか。ぜひ感想文を書いてみてください。中高生という、瑞々しく柔軟な今の精神で読んでほしい１冊です。

「夏の騎士」

百田　尚樹／著　新潮社　９１３．６ヒヤ（一般）

ひと夏の思い出話。特に学生時代の夏というものは、どんなに年を取っても思い出せば胸がいっぱいになるような忘れられない宝物です。ドキドキわくわく、ヒヤヒヤ、メソメソ、たくさんの感情の中に見つけた本当の愛と勇気、そしてかけがえのない友情。きっと君たちの夏にもあるはずです。

この本を読んだら、自分が今大切な時間を生きていることを実感できることでしょう。面白くて読みやすい文体と後半の加速度を体感せよ！

「線は、僕を描く」

砥上　裕將／著　講談社　９１３．６トガ（一般）

突然の事故で両親を亡くし、その喪失感から抜け出せず心を閉ざしていた大学生の霜介は、バイト先の美術館で不思議な老人と出会う。老人は、展示してある水墨画について、霜介に次々と感想を求めた。思いのままを口にする霜介に、老人は「水墨画をやってみないか」と言った。その老人は、水墨画の巨匠・篠田湖水だった。湖水の自宅で水墨画を習うことになった霜介は、だんだんとその魅力に目覚めてゆく。

「拝啓パンクスノットデッドさま」

石川 宏千花／著　くもん出版　913イ

高校生の〈夏目晴己〉は二歳年下の弟である〈右哉〉に、今日も聞かれる。
『いっしょにバンドやってくれる人、まだ見つかんないのー？』と。
たった二人で暮らしている古アパートに、母親はたまにしか帰ってこない。晴己が“ここ”にいられるのは、右哉の存在と〈しんちゃん〉からのおさがりベースがあるから。自然と芽ばえていた弟といっしょにパンクバンドをやりたいという夢。かけもちのバイトをしながらも、抱いたその夢は晴己自身とその周りの人々を変化させてゆく。

「教室に並んだ背表紙」

相沢　沙呼／著　集英社　913.6 アイ（一般書）

本を借りないのに、毎日図書室を訪れる同級生を不審に思う図書委委員のあおい。宿題の感想文を、本を読まないで終わりにしたい本嫌いのあかね。学校の図書室を舞台に、各章ごとに主人公が変わっていく連作短編集です。

「流」

東山　彰良 ／／著　　913.6 ヒ（一般書）　講談社

土煙の匂いがする。
異国の人々の、声とか、汗とか、血とか、涙とか。遠くから声がする。残響のように、じわじわと、首が閉まるような、閉塞感。
1975 年、台湾。偉大なる総統が亡くなった。直後、突然祖父が殺された。だれに？そして、なぜ？無軌道に生きていた 17 歳のわたしには、その意味がわからない。前途のない人生に等しく。
「流」…。大陸から台湾、そして日本へ。かつて戦争があり、内乱があり、友情や恋や、仕事や挫折が、こもごも、わたしを通り過ぎていく。道端の石ころでも転がすように、わたしの意思なんか、まるで無頓着に。
ほどけて、なんとか結んで、いつのまにか、流されている。ああ苦いな。苦しいな。

「三島由紀夫レター教室」

三島　由紀夫 // 著　B913.6 ミ　筑摩書房（一般書）

職業も年齢も異なる 5 人の登場人物が、お互いに文通をして、怒ったり恋したり、画策したり愚痴ったりする、とにかく心の忙しい手紙形式の物語。人間ここまで赤裸々になって、言葉を尽くして言いたいことをバリバリの主観で一方的に言い合う、なんてあるだろうか。全方位的にいい人とか、できた人って、ほんとうはいないのかも。
なんというか、みんな可哀想でかわいい。ヘタレで優雅でかなしい。おもしろくて馬鹿馬鹿しくて、芯があって、しゃーない。ほんとしゃーないわ。

「塩狩峠　改版」

三浦　綾子／／著　新潮社　B913.6ミY（一般書）

北海道、旭川、塩狩峠。雪原に影を落として、札幌行きの汽車は走っていた。明治末年、2 月 28 日の午前中。永野信夫は、夜からの結納のため、うれしく、汽車に揺られていた。途上、懐かしい知己に会い、親しく語り合っていた。上り急勾配を進行中、汽車が突然分離し、最後部の客車が、急速度で元の峠の方へ逆走しはじめる。恐怖に怯える乗客。信夫は飛びつくように、ハンドブレーキに手をかけた…。
ゆるぎのない愛と、信仰。そこに行き着くまでの、葛藤、苦しみ。塩狩峠に差し掛かるまでの、一青年の生涯を、ひとつひとつ、丁寧に折り目をつけるように、心に栞ってゆきたい。

「夜空にひらく」

いとう　みく／著　アリス館　913イ

鳴海円人（なるみ　えんと）17歳。アルバイト先で暴力事件を起こしてしまった。試験観察期間中、補導委託先である深見静一の営む「深見煙火店」に住み込みで働くことになった。深見をはじめ、煙火店の職人達のもとで自分も「花火職人」になるという目標を持ち、少しずつ変わっていく円人。煙火店の人々も温かく見守るが、深見と確執のある富樫だけは円人に冷ややかな態度をとり続ける。

自分ではどうしようもなかった育った環境。起こしてしまった事件。過去は変えようがないが、未来は創っていける。

「神さまの貨物」

ジャン＝クロード・グランベール／著　河野　万里子／訳
ポプラ社　953グ

おとぎ話のような語り口ではじまる第二次世界大戦中の物語、森の貧しい木こりのおかみさんがホロコースト行きの貨物列車から子どもを授かり、「神さまからの小さな贈り物」として夫や森に住む恩人に支えられながら、精いっぱいの愛情を注いで育てていくおかみさん。戦争の恐ろしさの中にも、愛がある、愛があれば生きていける、愛のすばらしさを感じさせる物語です。戦争や平和についてより関心が高まるこの夏、ぜひ読んでください。

「木洩れ日に泳ぐ魚」

恩田　陸／著　文藝春秋　B 913.6オン

男と女がいる。荷物を運び出して、がらんとしたアパートの一室。
ふたりは、明日には別々の道を歩むことが決まっている。

彼女のスーツケースを卓替わりにして、最後の晩餐をしながら、お互い予感している。今夜中に話さなければならないだろう。一年前の初夏、あの男を殺したのは、君なのではないかということを。

区切られた舞台、限定された登場人物、男女の視点が交互に入れ替わりながら、繰り広げられる心理戦。

人の心は、底知れず、思いもかけぬものが、埋まっているらしい。そうして、引っ張り出された真実が、必ずしも、救いとなるとは限らない。

「ライオンのおやつ」

小川　糸／著　ポプラ社　913.6 オガ　閉架 38-30

人生の最後を迎える人たちが住む瀬戸内海に浮かぶ島、レモン島にあるホスピス“ライオンの家”ここでは患者ではなく、ゲストと呼ばれる人々は自由に好きなことをして過ごせる。

そして、毎週日曜日午後 3 時から開かれる「おやつの時間」にゲストたちはもう一度食べたい思い出のおやつをリクエストできる。

あなたはどんな思い出のおやつをリクエストしますか？